

ブレース・サンドラール小伝(8)

加太宏邦

結局『黒い手帳』にもどることになる。

問題は、この手帳の中にあるエレーヌ宛の書簡の下書き(控え?)である。

全部で10通ある。それはほぼ日付順に並んでいる。ふたつ日付があるのは、前が露暦、後が西暦(かっこ内は発信地)。

① 1907年 1月31日(サンクト・ペテルブルグ)

② 4月11/24日(バーゼル)

③ 4月20/5月3日(ヌシャテル)

④ 5月14日(ヌシャテル)

⑤ 5月6/19日(ヌシャテル)

⑥ 5月11/24日(ヌシャテル)

⑦ 5月13日/26日(ヌシャテル)

⑧ 6月4日(ヌシャテル)

⑨ 6月28日(ヌシャテル)

⑩ 6月28日(発信地なし)

宛先の住所も国も記されていない。ただ、頭書がいずれも「エレーヌ」という呼び掛けになっている。しかし、発信地は⑩(これは⑨の追伸のようである)を除いてはどれにも記されている。

この書簡の控えについて大いに詮索をしてみたいのだが、残念なことに、それを徹底させるのが難しい。時間をかければ徹底するものもあるだろうが、袋小路に入り込んだようなものが多いのだ。

問題は大きく分けて二つある。一つは周辺的なアプローチで浮かび上がってくるもの。もう一つは、テキストクリティークから見えてくるものである。

まず、サンドラールは、一体、このように書簡の下書きまたは、控えを残す習慣があったか。じつは、彼のその後の手紙そのものは幾通も発見されているが、僕の知るかぎり、このように、手帳などに記録として残されたものはないのである。

同じ時期に、彼女以外の人にも多く手紙をだしているはずだが、その記録は『黒い手帳』にも皆無である。なぜ、彼女への書簡だけが、記録されているのだろう。それこそ「エレヌ」が彼にとって特別な人だったという証拠だ、と言えるかもしれない。しかし、その特別という意味は別のところにある可能性もある。つまり、記述される必然性が別にあったとも言えるのである。彼は、これを将来、なにかに、あるいはだれかに見せるために残しておきたかった。では、なにの為に。それについては、だんだん分かってくるだろう。

つぎに、興味を惹くのは、エレヌからの書簡がないことだ。もちろん、あるとすれば、それは、書簡そのものであるはずだ。たとえば、この『手帳』に挟まれているとか、どこか別のところから発見されるとか。なぜ我々は一方通行の情報しか持てないのか。

ぼくは、極端に疑い深くなっているのかもしれない。では、この手紙が発信された痕跡を探ってみよう。

じつは、幸いなことに、⑥と⑦の控えの間に彼の「小遣帳」のような頁が残っているのである。その記述を見ると、「支出」の項目に、切手購入の記録がある。

- a 5月10日 切手とはがき 3フラン
- b 5月20日 切手 70サンチーム
- c 5月24日 切手 25サンチーム
- d 同 切手 10サンチーム
- e 5月26日 切手 25サンチーム
- f 6月4日 切手 50サンチーム
- g 6月12日 切手 50サンチーム
- h 6月18日 切手 70サンチーム
- i 6月21日 切手 25サンチーム

この切手購入は書簡の発信と符合するのか。日付が合っているのは、⑥とe、⑦とe、⑧とfの三回である。もちろん、切手は買い溜めも出来るし、手紙は、日付通りに投函したのかどうかは分からない。この内eの5月26日は、当時のカレンダーを調べると日曜日である。郵便局の閉まる日曜日に切手を買うのは、キオスクのような所だったのか。

当時、スイスからロシアへの切手代金はいくらだったのだろう。過去の郵便料

金表をベルンの郵便局で調査してもらって該当する時期のもののコピーを手に入れることができた (Tarif postal de poche pour la Suisse et l'Étranger. Direction générale des postes suisses)。「1906年2月15日改定料金表」というちょうど、サンドラールが手紙を書いた時期のものである。それによると、外国便は、20グラムごとに25サンチームだと分かる(この料金は1911年まで続いたそうである)。彼の購入した切手はほとんどが25サンチームを含んでいると推測される値段になっている。国内便が10サンチームだったので、それと合わせると、どの支出も、外国便料金を含む支出を想定して不自然ではない。外国は当然、ロシアである。

つまり、このことから見るとサンドラールは本当に、この手紙をエレーヌ宛に送っていた蓋然性は極めて高い。しかし、なお、疑えるのは、長年勤めたロシアから帰ったばかりの青年が、ロシアの知己(とくにもとの勤め先関係者)に手紙を頻繁に出していたと考えることもなお捨て去れない可能性である。というのは、少なくとも、エレーヌ宛の書簡の数より購入している切手の枚数の方が多そうだからである。

ついでに、この小遣帳での他の支出はなにがあったのか。じつは、支出項目の半分近くが切手で、その他では、トランク(33フラン)、靴(20フラン)、ロシア語文法書(2.65フラン)、市電(10サンチーム)、ビリヤード(50サンチーム)、薔薇の花(2フラン)、送料(1.5フラン)、新聞(3回計55サンチーム)紙(1.15フラン)だけである。そもそもなぜ、この時期の小遣記録だけがエレーヌとの文通と重なるようにして手帳に記されているのか。記録は5月8日から6月21日までで、2ヵ月弱だけなのである。

べつの調査で、当時、スイスからペテルスブルグへは、平均5日前後で送達していたことが分かった。受領した手紙に即返事を書くという、いわゆる往復便を実行していたとすると、彼は、ほぼ8日-12日に一回発送していたことになる。先の、手紙の日付の間隔を見ると、

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩
70 9 11 5 5 2 9 24 0 (数字は日数)

となっていて、典型的な意味での往復書簡の可能性があるのは③、④、⑧の3通だけである。しかし相手の返事も待てずに先に出す、ということも十分考えられ

るから、間隔が縮まっているのはさほど問題にならない。しかし、②や⑩の大きな間隔はどうしたことだろう。そういう頻度のばらつき(つまりエレヌへの気持ちのばらつき)が気になる。

ところが、もう少し子細に見ると、書簡の書きぶりから、その手紙のほとんどが明らかに「返信」なのである。①(「あなたの手紙を何度も読み返しました」)③(「2枚の葉書と3通の手紙を受け取りました」)④(「あなたの手紙を受け取りました」)⑤(「あなたの手紙を受け取りました」)⑥(「あなたの先便は...」)⑦(「あなたの手紙を今受け取りました」)⑧(「あなたの写真をもらって嬉しい...」)。つまり、間隔の大小は、全てがエレヌからの来信に対応する形になっているのである(②はスイスへ帰着したことを知らせる手紙だから、当然彼が発信するし、⑨と⑩はエレヌの兄からの「事故」を知らせる手紙に対するものだから、エレヌは介在していない)。とくに間隔が狭い部分は、彼が思いを募らせて矢も楯もたまらなく出していたのでなく、むしろ、彼女が、彼の手紙を待たずに、次々と発信していたということになる。彼女が③と④の間で1通、④、⑤と入れ違いになるように計2通、⑤と⑥の間で1通出していたことになる。やや奇妙である。なぜ彼女はそんなに性急だったのだろうか。そして彼の方は自ら出す形をとらないのだろうか。これは二人の恋心の落差を語ることなのか。

この点では、とくに③は、彼女の思いに関係しているのだろうか。彼がスイスに着いて初めて出した②は、おそらく普通なら4月29日前後にペテルスブルグへ着く。これを待って、彼女は初めてスイスの彼のアドレスに発信したはずだ。しかし、それが「2枚の葉書と3通の手紙」というのは、どういうことだろう。長い手紙というのなら分かるが、計5通を一度に発信する状況はいささか不可解である。

ここで、手紙の日付について、別の可能性から、多少検討してみよう。それは、今までの議論は、一つだけ記された日付は西暦(発信地のスイスの暦)をあてて解釈したものだが、逆に露暦をあてたらどうなるだろう。発信日付の間隔は次のように変わる。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩
70 9 -2 18 5 -4 9 24 0 (数字は日数)

実は、この説はルロワ (Claude Leroy: *La main de Cendrars*, p.81) のものである。彼は、「書簡の日付は、宛先の国の日付」である可能性が高い、と言い、⑨の日付の6月28日は実はロシア暦であって、スイスに直して6月15日と読むべきである、従って、「エレヌの事故」を知らせる手紙がロシアで発信されたのは6月11日(彼はスイス=ロシア間を4日としている。それは、書簡中にある記述にもとづいている。ぼくは、いちおうスイスの郵政局のデータを信頼して5日前後としている)、とすると、エレヌは6月11日に入院し、同日に死去した、という結論を出している。そして、サンドラールの二つの作品中に見られる「6月11日」をそれを補強する根拠として出している。しかし、それは、都合のよすぎる解釈ではないか。なぜなら上で分かるとおり、この日付設定だと③と④の書簡、⑥と⑦の書簡は、下書き(控え)の日付が逆転してしてしまう。手帳に記録する場合は時系列で並ぶのが普通で、頁を前後させて記していくのは、特に書簡の記録ではあり得ない。全体としても、往復に要する10日ほどの間隔がほとんどの所で見られなくなり、大きすぎるか小さすぎる間隔になってしまう。小遣帳についても、彼女が6月11日に死んだとするなら、その後の18日や21日にまで、切手代や新聞代を記録する精神状態でいられるだろうか。10サンチームの新聞代を小遣帳に記入などする神経が分からない。なにより、6月28日づけの2通の手紙に控えがあることがほとんど信じられない。出来事の大きさにもかかわらず、悠々と下書きをしてから発信する、あるいは発信したものを控えにもう一度書き記すなどというような精神状態がとうてい理解しがたい。

なお、手帳の「手紙」は、どれも訂正、修正などの書き直しがないので、これが手紙の「実物」と照応しているなら、当然「控え」である。下書きなら、もっと推敲のあとがあって当然だし、推敲しないで出せるのなら、下書きの意味は、いよいよ不可解である。

さらに、もう一つ、①の手紙である。これは、彼がまだペテルスブルグ滞在中に出したものであるが、エンドウマメ通りの34番地に動めている彼が、74番地(もしミリアムさんの言うとおりになら)に住むエレヌと文通するのだろうか。目と鼻の先で会うのに不都合なことがあったのだろうか。それとも、男女の交際が文通であることが自然だった時代の反映なのか。サンドラールは、そういうメンタリティーの人間だったろうか。

ここで、すこし目先を変えて、彼の読書記録(これもこの手帳に記されている)を眺めて見る。そこから、同じ時期(1907年1月から2月にかけて)にバンジャマン・コンスタンを読んでいることがわかる。何の作品かは明記していないが、『アドルフ』である可能性が高い。

コンスタンは彼と同じスイス人である。『アドルフ』には周知のとおり「ある未知の人の書類の中にあった物語」という副題がついている。そういうしかけを持つ小説はよくあるものである。実話にみせかけるための手法である。ひるがえって、死後発見された『黒い手帳』こそサンドラールの「しかけ」ではなかったのか。

ここまで読んでこられた方はすでにお気付きのように、ほくは、エレヌの存在を否定的に実証しようとしているのである。エレヌは(モデルがいたとしても、あるいは、女友達の一人にそういう人物がいたとしても)この手帳上では、創作上の人間で、したがって、こういう「悲劇的な終末をむかえる若き日の恋愛」とでもいうようなフィクションのプロットだったのではないか。ようするに、本稿の目的はこの仮説を構築することだったのだ。とにかく、また『アドルフ』にもどって、話を続けよう。

コンスタンの小説の女主人公の名前はエレノール Ellénore。音としてエレヌと似通った響きをもっている。とくに Héléne のロシア名は Elena である。エレノールはこの物語では、最後には苦悩から病死する。エレヌの最期(と伝えられるもの)も痛ましい。また、エレノールはアドルフ(22歳)より10歳年上の女性なのだが、サンドラールの10通の書簡にあるエレヌという女性に対して、ほんの部分的な表現を除いては、かれは終始 vous で語りかけている。しかし、そういう用語をべつとしても、彼の、物言いは、どうしても「19歳」の若い女の子に向かっているのとは違うある雰囲気を感じる。この点では、クロード・ルロワも「彼は、彼女に関して、弱い関係にあったか?彼女は彼の愛人 *maitresse* だったか?」と言っている(同書:p.65)。彼が19歳だということを考え合わせると、この場合の *maitresse* は「女主人」というニュアンスが濃く、どこか年上の女性を思わせる。もっともルロワは、あくまでエレヌを実在の人物と見立てての上での議論ではあるが。

このあたりで、書簡のテキストを見てみよう。

これら10通の書簡で、だれもが感じるのが、文体の抽象性である。ほとんど「肉体」が感じられず、観念だけが徘徊している。どうして、そういう感じを懐くのかというと、この書簡には、二人の共通の体験にあるだろう具体的なものについて述べた部分がないからである。散歩に一緒に行ったとかいう共通の行動の想い出、相手の服装や持物などにまつわる生活実感、家族とか共通の知人についての具体的な話題、固有名詞などがほとんど欠落しているのである。ほくたちが他人の「書簡集」を繙くときに、文通する二人の間でしか了解しえないことが多々あって、そういう部分は校訂者の注釈の助けを借りて読むことがしばしばある。

コンスタンの名前がでたから、ついでに彼の書簡を一例に見てみよう(『ロマンディ』18号所収の高藤冬武氏訳を拝借させていただく)。ランダムに1788年4月14日のから。「でも……の愚痴はこぼすまいと」「あのご立派な従兄のように」「ヴィッテルの行為、怒りに身が震え」「犯行を見聞したという(悪事)」「詩文、最終稿が一番と思いますが」「ルイーズ嬢回復に向かってのことと思います」。はじめの「……」は伏字で、両者だけが了解できる人物の名前。つまり名前をだすと都合の悪い彼女の「夫」らしい。つぎの「従兄」は、二人には誰のことかが了解されているが、ほくたちには、高藤氏の注釈がないとだれかは分からない。「ヴィッテルの行為」は何をさすのか…以下同様に、文通している当人同士でのみ分かって(いうまでもなく第三者に見せるものでないから当たり前なのだが)そこからほかに遠いほくたちには何もわからない事項がたくさんでてくる。書簡というものはそもそもそういうものなのだ。

ところが、サンドラールのこの書簡控えについては、そういう注釈、あるいは解説の必要がほとんどない。彼と状況を共有しないほくたちでも理解できる内容なのだ。とくに、ほくたちに奇異な感じをいだかすのが、(彼の方はややあるものの)相手の身元を知るための情報が、明示的にも、暗示的にもないことである。それが、青年らしいという理解で、いままでは自然なものと考えられてきた。しかし、この抽象的な無色さは、少年のつくる観念的小説のプロットではないかという解釈も可能にしないか。

この「手紙」は、どちらかというとき重々しく、暗く、自己嫌悪の記述が多い。恋に浮き浮きしているとか、燃えているとか、会いたくて仕方がないような情熱とか、自慢とか、そういうラブレターから溢れ出るような前向きなものが欠けてい

る。青年期特有のメランコリーや、かれの社会的身分の不安定さは、たしかにあるが、コンスタンの場合は、相手があり、その肉体があり、顔つきがあり、生活があり、共有する話題があって、それをめぐって彼が暗くなっていくのである。つまり、状況との共犯性があるである。しかし、サンドラールの場合は、一方的な、いわば独り言という感じをうけるのである。

「手紙」に少しふれてみよう。固有名詞の欠如と言ったが、たとえば書簡の末尾は「あなたのすべての知り合いの人達とあなたのご家族によろしく」などと結ばれている。さきに指摘したように、人名がないのである。まるで、手紙の書き方の結語のサンプル文である。親密さのパロメーターは、モノが固有名詞化し、その度合いを深めるのが通例である。「あのひと」が「兄」になり「太郎」になり「タッチャン」になり「ター」になっていく。サンドラールの手紙では、常にといいほど「あのひと」段階である。そのていどの関係のラブレターもあり得るが、それなら、エレーヌの焼死がショックでそこからサンドラール(灰にちなむ)という筆名をつけたなどというドラマ仕立ての話には、すくなくともぼくはかなり違和感を感じる。

(つづく)